

論文

武者小路実篤論

—意識・言葉・理屈と無意識・身体・心—

学芸学部・日本語日本文学科 生井知子

はじめに

これまで、武者小路実篤研究は、大津山国夫氏によって精力的に推し進められてきた。大津山氏は、その著書『武者小路実篤論』（昭49・2東京大学出版会）などで、実篤には、働かないで食べている特権階級の一員・加害者としての負い目があり、搾取する者と搾取される者がいる社会の不合理をなくし、皆が幸福になれる社会を作りたいという願いが実篤を強く動かしていたという事に注目し、彼がいかにしてトルストイ主義に傾倒し、その戒律に苦しんだか、またメーテルリンクとの出会いによって、なぜトルストイから一時離反するに至ったか、さらにそれを乗り越え、いかにして『新しき村』という理想社会の建設に至ったか、その経緯を論じておられる。

大津山氏の論は丁寧で説得力を持つが、しかし、それだけでは、実篤がどうして『新しき村』から離れたのか、またどうして彼の後半生を絵画に費やしたのか、等々の疑問に十分答える事は出来ない。

私は、実篤をより根源的に突き動かしていたのは、大津山氏が強調されているような働かないで食べている特権階級の一員としての負い目よりも、むしろ実は、幼少期に起因する根源的なコンプレックスだったと考えている。

これは、拙稿「武者小路実篤試論—歌と欲望をめぐって」（平9・4『詩う作家たち』至文堂）で既に論じた事だが、私は、幼少期の実篤は母の愛に十分安心して包まれる事が出来ず、その為、外界に対する「基本的信頼感」（エリクソンの用語）を持てなかったと考えている。不幸な幼少時代の結果、実篤は心身共に抑圧され、いじけて淋しい自閉的な人格の持ち主になってしまい、外界・世間に対しては被害妄想的な敵対意識を持つようになってしまったと考えられるのである。『世間知らず』（大元・11）などには、自分の心が、『鎧を着てゐる』（二十）という表現があるが、それはこうした状況を表わしたものだだろう。

本稿では、実篤が、いかにして、この根源的なコンプレックスから脱却していったか、そして心身共に解放され、自他とともに肯定的に受け入れられるようになって

ていったか、さらには死の恐怖を乗り越えられるようになっていったかという視点から、実篤の言動を考えてみたいと思う。

一

武者小路実篤が心身を解放する為の方向性は、二つあった。一つは、劣等感の克服として天才を目指す事である。実篤には、世界的な偉人や天才など優秀な存在に成り上がりたいという願望が一貫して見られる。これは、父母にほめそやされる時に乳幼児が抱くような健全なほほえましいナルチシズム（万能感）を充分得られなかった実篤が、それを遅ればせながら手に入れようとする幼児的な欲望と言えるが、天才願望については、既に「武者小路実篤試論—歌と欲望をめぐって」で論じたので本稿では触れずに置き、心身を解放するもう一つの方向性を中心に考えていきたいと思う。それは、母の愛に満ち足りた子供のように、自由に歌ったり、おどったりするという幼児的で身体的な欲望の実現なのである。

天才志向が自分を強く大きく他に優れた価値あるものとして一人屹立させ永遠化しようとする自意識的な願望であるのに対し、こちらは大きな母なる存在に包まれた小さな自分に帰る事で満ち足りようとする願望で、反対の方向に向かうものである。実篤の場合、それは、まず、大人の論理以前・意識以前のものを大切にするとする形で現われる。

実篤は、作家活動開始の時点において、意識と無意識との関係を独自にとらえ、意識・言葉を攻撃目標とし、無意識・言葉以前の心の回復を目指すという自己の生涯の方向を既に示していた。おそらくこれは、『智慧と運命』や『貧者の宝』の「沈黙」の項などに見られるメーテルリンクの思想の影響もあると考えられる。またこの頃、世界的に流行していた心霊研究とも関係があるかも知れない。

当時の実篤の考えを窺わせるものに、『聖なる恋』（明41・4『荒野』）という初期作品がある。この作品の主人公の一郎と静は、お互いに口をきいた事もなく相手の存在を認識していない内から、『意識にのぼらぬあるもの』（一）が恋い慕う相手で

ある。二人の出会いが次のように描かれている。

「ある日偶然に二人は往来で逢つた。よささうな人と一郎は思つた、よささうな方と静は思つた。この時二人は恋に落ちたのである。しかし二人はそれを知らずにはない。(中略) 其後同じ所で二人は三度逢つた。逢ふわけである、一郎は何ものかに憧れる時、ひとりで足が其処に向く、静もその時そこに我れ知らず足が向くのであつた。しかし意識にのぼらぬあるものが、二人を其処に導くので多くは意識の為にまたげられて、二人は十に一つも逢えなかつたのである。」(一)

やがて静に別の男性との縁談が起るが、最初、彼女は「否定する理屈を見出せなかつた」(二)にも関わらず断る。しかし一郎は、「世の人を恐れ」(三)、静に求婚出来ない。一郎は、彼女の側から求婚してくれればとも思うが、もしそうされれば「一郎の理屈がその女の厚顔なのを罵倒する」(三)事が分かつている。

結局、「意識」や「理屈」に従つて、二人は互に別の人と結婚する。そして作品の結末は「静は夫を愛し、一郎は妻を愛してゐる。しかし二人の夫婦の間は、意識なしには感情の調和は望めない。二人の夫婦は意識上の夫婦である。意識にのぼることにて夫婦間になくはならぬことは皆満されてゐる。幸に二人は意識し得ないもの、存在を認めないから今の自分を以て満足してゐる。」

されど、今も二人の感じて知り能はざる或ものは孤独に泣いてゐる、さうして互に恋ひ慕つてゐる。(四)と結ばれるのである。

お互いに言葉を交わして理解しあうのが普通の恋愛だが、こうした口をきいた事もない者同士の無意識における恋愛を実篤が書いたのは、彼が、日吉タカとの結婚問題の行方に危惧を抱きつつ、言葉を交わしていない事をむしろ真実の愛の証のよう半ばは信じ、半ばは信じたがっていたからだろう。

「お目出たき人」(明44・2)にもまた、無意識と意識の分裂が見られる。

「お目出たき人」の主人公は、「自分は鶴以上に自我を愛してゐる。」(一)「自分は極端の個人主義者である。」(四)と主張するが、彼が何よりも大切にする自我とは、いわゆる近代的自我や自意識の事ではない。主人公は「人智を信じない自分は運命を信じたくなる。」(二)と言ひ、話した事もない鶴と道徳的に結婚しなければならぬと自分が感じる所に「自然の命令、自然の深い神秘的暗示」(九)を見、「運命が自分と鶴とを夫婦にしなければおかぬ」(九)と考える。結末において、鶴は別の男性と結婚してしまふが、それでも主人公は、鶴は自分を恋しつゝ、仕方なしに結婚したのだと「理由もなしに」(十三)思うようになる。そして「鶴が『妾は一度も貴君のことを思つたことはありません』と自ら云はうとも、自分はそれは

口だけだ。少くも鶴の意識だけだと思ふにちがいない」(十三)と考える。それは単なるうぬぼれではない。合理的な意識・理性・言葉による説明より、無意識的な直観と非合理的な運命・自然の方を彼が深く信じているからなのである。

実篤が、実生活において、あれほど執拗に鶴のモデルである日吉タカに求婚できなかったのも、自己中心的な我が儘だけではなく、心と心の「共鳴」(明41・6・22日記)を直観的に感じて信じていたからなのだ。

「世間知らず」においても、C子は、「言葉で通じあふものならつまりません。」(「理屈を云つてはいやです」)(五)「まわらない言葉のためにわるく思召してはいや」(二十)と主張し、主人公はだまされてゐるのではないかと何度も思うが、「言葉は嘘はつけるがリズムは嘘がつけぬ」(二十四)と心の底の信頼に従ひ、C子と結ばれる。「或る男」(大10・7・12・11「改造」)にも、房子に対して「彼の理屈は時に疑つた、しかし彼の直接に受ける感じは相手を信じさせた」(百四十五)とある。「世間知らず」は、世間や大人のよしとする言葉や理屈を拒否し、心を信じて結ばれた「小供」(三三)・「赤ちゃん」(二)の様な二人を描く挑発的な作品だったのである。

意識・言葉を攻撃するのに対して、実篤は、無意識・言葉以前の心(無心)を重視する。実篤にとつては、「人間の心は/完全な楽器、/どんな喜びの樂も奏しうる楽器。」(「瞑想」大13・10・11「不二」、大14・1・2「中央公論」)なのであり、彼は、頭で理解される言葉の論理的な意味ではなく、心に直接伝わる音楽にたとえられるような何か(即ち、テレパシー的なもの、「リズム」)の方が、心の真実を表わすと考えているのである。

人間の心が楽器のようなものであるとすれば、当然それは他の心と「共鳴」したり、快く「合奏」したりする事もあるれば、お互いに無関係な旋律を奏で不愉快な「騒音」を形作る事もあるだろう。

実際、先程も述べたが、実篤は、「共鳴」を感じるが故に日吉タカに執拗に求婚したのだし、彼女をモデルとした「聖なる恋」の中でも、「二人の間には何ものかあるに違ひない。同じ震動をして音を発するもの、一つが音を発する時他のものも知らずに音を発する。二人の間は恰もこのやうであつた。」(一)と、音叉の比喻で心と心の「共鳴」を描いていた。また、例えば、「四つの絵に頭はされたる快樂」(明43・7「白樺」)という文章の中で、実篤は、「人間は意識的に或は無意識的に自己の個性と合奏し得る相手を求めてゐる。さうして合奏し得る時云ふべからざる愉快を感じ、合奏し得ざる時に云ふべからざる淋しさを感じ、他の個性と騒音をつくる時云ふべからざる不快を感じる。」(「万物と合奏し得るものが、この世の最大幸福な

るものである。(五)と述べている。

「共鳴」し「合奏」する事を、より身体的に表現すれば、同じ「リズム」にのって「舞踏」(tanz)するということになるだろう。だから、実篤は、例えば「お目出たき人」の中で、恋人を求める心情を、「あ、女と舞踏がしたい、全身全心を以て。」(一)と表現するのだ。

実篤の考える「リズム」は一種の気のようなもので、作品の中にも自ずと込められる。だから、実篤は、芸術作品の中に、作者の心が奏でる「リズム」を聞く。そして、文芸でも演劇でも絵画でも彫刻でも、個別の表現技法や内容ではなく、決まって「リズム」という同一の視点から評価を下すのだ。

例えば『エレクトラ』の芝居について、実篤は、「エレクトラは芸術的作品である。あれを見て自分達は自分を反省する必要はない。(中略)しかし音楽のやうにリズムはなりひびいてゐる。そのリズムにのれないものには交渉はないけれどもリズムにのつたものは心ゆく限りリズムにのり、最後のエレクトラの狂的なおどりを自らも心の内で一緒にしたくなるにちがいない。」という評価の仕方をする。彼にとって「リズムのない詩は存在の価値がないやうにリズムのないドラマは存在の価値がない。」(『六号評』大2・11「白樺」)のである。

またチントレットの絵画についても実篤は同様に、「チントレットよ、お前は何処まで自由なのだ。そしてお前の自由さにお前のリズムはなりひびいてゐる、恐ろしい程に。(中略)お前のかいた「最後の晩餐」のリズム。(中略)其処に大管絃楽の最高峰にたつた時のやうな大音響がある。すべての音が生きて、一つになつてなりひびいてゐる。お前の心が生きてゐる。燃えてゐる。(中略)お前のやうに自己のリズムをなりひびかせたらさぞ氣持がよかつたらう。」(『雑感』(5)「チントレット」)大6・3「白樺」と語るのである。

実篤にとつては、ドストエフスキーもロダンやゴッホもレンブラントも、皆その心が発した「リズム」故に強く感動させられる存在だったのである。

実篤作品の中で、女が男の前でおどりをさせる事が二人を結婚に導くのも、彼が言葉というものを信じていない事の現われである。

例えば『第三の隠者の運命』(大10・1・3、5・9、11・1・3、6、8、10「白樺」)の桜子は、恋人となる主人公の為におどるし、『若き大雅堂』(昭9・6「塔影」)の町は、人前でおどるのを嫌うのに、大雅の前では喜んで氣持よくおどる事が出来、二人は結婚する。『友情』(大8・10・12「大阪毎日新聞」夕刊)において、杉子とピンポンをした翌日、大宮があわてて洋行を決意するのも、ピンポンという身体の会話によつて、二人の氣持が通じて仕舞つたからだろう。

実篤は、自己と外界との戦いそのものを作品化する事もある。彼が解き放とうとする心は、言葉以前のものだから、その戦いは、議論ではなく、必然的に「おどくらべ」や「歌くらべ」という身体的な形をとる事になる。

「おどくらべ」のさきがけともいふべきものに、『桃色の室』(明44・2「白樺」)がある。これは、「灰色の心を持つて、灰色の着物を着て、凍えるやうな声で灰色の歌を唱つて、床にあはせておど」らせようとする「灰色の心臓」からの、「すべての人の心臓を桃色にしてやろう」とする「桃色の心臓」への攻撃を描いたものである。灰色の女たちが一方的に攻め込んできて嘲笑的な歌とおどりを繰り返して帰るのに対し、若い男は、まだ対抗して自らおどるすべを知らない。彼は、狭い桃色の室の中に閉じこもったまま、「淋しさ」に身をふるわせて、わずかに「俺と共鳴するもの、心を桃色にして見せる。」と宣言するに過ぎない。戦いはまだ自閉的な抵抗のレベルに留まつているのだ。

『おどくらべ』(明45・3「短檠」)は、表題のごとく、岡の上の男と岡の下の人々との「おどくらべ」を描いたものである。岡の上の男を下ろそうとして下の人たちが愉快そうにおどったり、嘲笑したり、優しく誘ったりするが、岡の上の男は、「いくら淋しくても自分は之より下におりることは出来ない、自分は自分の力で彼等を自分に合はせておどらせなければならぬ。」と考えて、一人でおどる。それは「芸術的ではないが」(『面白い』)「人間らしい」(『まるで専門家ぢやない』)おどりで、ついには皆、岡の上の男に合せておどり出し、上と下とでますますおどりが元氣になつていくというストーリーである。大人の既成の秩序に抑圧的な苦しさを覚える実篤は、芸術的でないもの・専門家ではないものにこそ、心の表現があると感ずるのである。

やがて実篤は、『三和尚』(大4・9「太陽」)のように、登場人物が実際におどる場面をクライマックスとする作品も、書き始める。その場合のおどりは、殆ど常に出鱈目で即興的な、いわばおどらしくないおどりである。それは、現実社会の身体秩序からの脱却が目指されているからだろう。

二

このように、頭での意識的理解や理屈ではなく、それ以前の幼児的・身体的な心こそが本物であり、それに従つて生きるべきだとする考えに立つて、若き日の実篤は、「心に苦しみを持つてゐる人を慰藉する」(『精神上の医者になりたい』)(明41・4・21日記)、「自分は現代の人の頭で罵倒し、心臓でのぞんでゐるものを捜し出し

て人々に教へたいと思つてゐる。』(『お目出たき人』(五))と決意していた。

その為には彼が選んだ第一の方法は、書く事だった。書く事は、抑圧してきた無意識・心を解き放とうとする彼の最初の自己治療の試みであり、かつ他者への治療行為でもあった。

だから実篤は、抑圧されはけ口を求めている無意識を、どうにかして言語化し、表現して、それを他者の心と触れさせようとする。《世の中がはやくつて困る。論文をかくのも、小説をかくのもはがゆい。六号で相手なしに怒鳴つてゐるのが一番いい。》(『六号雑感』(一))明44・1「白樺」という理由から、六号雑感欄を「白樺」に作つたのも、論文や小説という既成の表現形式の中に納まり切れず、彼の内に煮えたぎっていたものに、噴出口を開いてやる行為だった。

この抑圧されている無意識を噴出させ、心の躍動・リズムをさながらに伝える事が出来れば、それと「共鳴」し、「合奏」し、「舞踏」してくれる他者の心があるはずだった。《自分の心をぶちあげたものが書きたい。さうして自分の心とびつたりあつておどつてくれる心を探し出したい。》(『手紙四つ』)その四「明44・12「白樺」」とは、そうした願望の表明なのだ。

しかし、本来、言葉以前の存在である無意識・心の躍動を表現するのに、言葉をもつてするのは困難な技である。そこで用いられるのが、詩の言葉になる。実篤にとつて、《詩は文学の内では一番無心に近いもの》(『画と文学』昭13・1「中央公論」)であり、詩の言葉は、意識の側に属してはいるが、《地面からはなれることが出来ない》(『後書き』昭22・8「歓喜」)日常の言語とは違い、《興奮して表現が自づと飛躍し、常識以上の羽根の生へた言葉》(『詩に就て』昭23・4「詩学」)なのだ。詩とは、いわば無意識と意識の間の掛け橋なのである。

実篤は、無意識を詩の言葉で吐きだそうとする傍ら、無意識を抑圧する現実社会(世間)と戦い、自己の正当性を主張する言論を繰り広げる事になる。『荒野』や『お目出たき人』所収の作品群の文体が、演説や議論、シブプレヒコールに近いものとなっているのは、その為である。

また、実篤は、孤独に戦う自分を癒す為に、自己鼓舞の作品や自慰の作品も書き綴る事になる。若き日の実篤の詩の多くは、自分で《自分の淋しさをなくさめ》(『自分を鼓舞する為』)「まえがき」昭41・11「武者小路実篤詩集」)のものだったし、小説や脚本に登場する仮構の他者は、主人公の心と共鳴してくれ、主人公を励ましたり慰めてくれる存在なのだ。《自分は自分の心を他人の心と舞踏させることが好きだ。それが出来ない時、自分は空想に於て二つの心を舞踏させて喜ぶ。自分のかく或る種の会話は多く二つの心を舞踏させて自分を喜ばせる自分の性癖の結果に

外ならない。》(『雑感』(2))「心と心の舞踏」大2・4「白樺」とは、そうした事情を物語るものである。

しかしながら、実篤は、言語表現によつては結局満足できなかった。一つには、非言語的な無意識を直接的に言語化して吐露しようという企てに無理があった為である。だから、実篤は《自分の個性を燃やしつくしたい。全部出し切りしたい、どうも思ふやうに自分の胸がすかない、表現したいものが全部的に表現が出来ない。もつと深いものがあらはしたい、もう少しだと云ふ気がたへずする。自分の内にあるものを解放したい、自由にしたい。飛びまわりたい、叫びたい。鳴りひびかしたい。》(『雑感』(5))「流行児」大6・3「白樺」というもどかしさを感じざるを得なかったのである。

また、もう一つには、実篤が欲していた身体的一体感は、言語表現では満たす事が出来なかったという事がある。《いくら書いても、いくら書いても淋しい。(中略)自分の心が他人の心にふれないことを感ずる時》淋しい、《世界中の人間に理解されるまではこの淋しさはつづくにちがいない。(中略)どうしてもこの淋しさはぬけないのだ。さうしてこの淋しさは自分に何かかくことを強いるのだ。》(『或る画に就て』)及び其他感想「いくら書いても」大2・7「白樺」という言葉は、実篤の中にあった、人の心との接触に対する深い欠乏感が、書く事によつては埋められない事をよく示している。

三

武者小路実篤は大正七年末、「新しき村」を創設する。それは、本質的には、抑圧されてきた無意識・心身を解き放ち、自己と他者を共に受け入れようとする実篤とその仲間たちの自己治療の為の場だったと考えられる。

『或る男』によれば、この「新しき村」の夢は、明治三十九年十一月二十日に早くも抱かれており、《文学をやらうと思つたのと、新しき世界を生み出したいと思つたのと、殆んど同時である。それは彼の双生児である。》(『百』)という。これまで述べてきたように、実篤にとつて、文学が抑圧されていた心身の解放を目指すものであったとするならば、当然、「新しき村」も心身の回復を目指すものであると考えられる。

また、明治四十一年五月十九日の日記(『彼の青年時代』)には、自分の仕事は《新しき社会をつくる事だ。理想国の小さいモデルを作る事だ。》という記述があるが、同じ日、実篤が書いた『雲雀の歌』(明41・6「輔仁会雑誌」)という譬話から

考えても、彼がこの日思い描いていた新しき社会・理想国とは、抑圧を乗り越え、皆が心の底から歌えるような世界なのだと考えられる。

「一人の男」(昭42・1・45・12「新潮」)には、《多くの批評は新しき村の問題を経済問題としてあつかい、オーエンの垂流として批評し、空想社会主義ときめてかかっていた》(六)が、それは見当違いであるとし、《僕達は内心の要求でこの仕事を始めたのだ》と書かれている。実際、新しき村が経済学的な観点に立った共產主義的モデル農村であったなら、村外会員の経済支援を平気で受ける事は出来なかった筈である。新しき村に村外会員なるものが存在したのは、新しき村が経済学的な観点に立った共產主義的なユートピアではなく、心と心が共鳴し合奏する心のユートピアだったからだろう。村内会員と村外会員とは、出家信者と在家信者のようなものである。だからこそ会員たちは同志ではなく兄弟姉妹と呼ばれたのだ。やや誇張した言い方をするならば、新しき村は、いわば一種のワークシヨップで、心身回復の為の集団的な試みだったと言えるだろう。義務労働が重視され、それがデスク・ワークではなく農作業という肉体労働だったのも、身体性回復の為の治療と考えられる。新しき村には、お祭りがあり、おどりや行列という形での身体的な解放が重視されたのもその為だろう。

この時期、実篤は、群衆的な歓喜のおどりで大団円を迎える戯曲を多く書くようになる。例えば、『人間万歳』(大11・9「中央公論」)は、神様や天使たちが『人間万歳』を唱えて、賑やかな音楽の中、皆でおどる所で終わる。『出鱈目』(大15・4「中央公論」)は舞台監督が《底ぬけに愉快な音楽をやれ》《皆本心をさらけ出して愉快にをどれ》と声をかけ、見物人の中からもおどりに加わる人が出てきて音楽と舞踏が最高潮に達しようとする所で幕となる。『生命の王』(大15・11「中央公論」)も、『生命の王』を囲んで、見物人までが、皆、激しく出鱈目に、人間万歳、生命万歳ととなりながら、おどり狂って幕となる。『彼の誕生』(昭4・5「改造」)も天界呑気国のノンセンス広場の《人類》の前で、『赤児の心になれる人』たちが『出鱈目にをどれ』と呼びかけられる所で終わる。

これらは、『人類のお祭り』にふさはしい、又新しき村のお祭りにふさはしい(『文芸雑誌』「芸術の種類」大15・10・12「改造」)作を目指すものであり、そのクライマックスは、実篤が《一度夢のなかで舞台の上の人間と、見物全体とが一緒に切り切つておどり狂ひ、わめきたてたのを見た》時感じたような《途方もなく愉快な快活な》(『祭りの曲』大15・5「演劇・映画」)状態の実現を求めるものだった。この底抜けに愉快な歓喜のおどりと、身体性の完全なる解放状態、躁状態だろう。言葉や意識によって形作られる大人の秩序や安定を根底から破壊しようと思えば、一

見出鱈目と思えるような、群衆的な興奮の激しい歌やおどりが必要となるのだ。

四

「新しき村」の目的は、単に心身の回復にとどまるものではなかった。そこには、もう一つの重要な目的があった。死に打ち勝つ事である。

実篤は『或る男』の中で、《彼は常に死を思つてゐることは事実で、それにうちかづために戦つてゐることも事実だ。(中略)彼が社会主義者でをさまらないのも、自分の一生でこの問題をもつと根本的に解決したいと思つてゐるのも一つだ。彼は社会問題よりも、人生問題の方に自分の心を奪はれる。その方が彼にはなほ直接である。彼が神の国を求めるのも、すべての個人が死に勝てる道を歩むことの出来る国をつくりたいからである》(百二十一)と述べている。また『自分の人生観(新しき村の目的)』(大9・3・4「大正日日新聞」)にも、人類の本能や宇宙の本能(神的本能)を《実行的に生かして、人類にたいする自分の義務を果し、兄弟と、神、真理、愛、正義、美を愛する本能を益々生かしてゆくことによつて、個人は死に打ち勝ち、自己を不滅のものに結びつけることが出来る》(十六)とあり、実篤は、そうした世界を作る事こそが「新しき村」の目的であると述べている。

若き日の実篤に顕著だった天才・偉人・強者志向も、自己を永遠化して死に打ち勝とうとする試みではあった。が、それは自分は実生する価値のない穀潰しに過ぎないのではないかと不安と隣り合わせのものであったし、すべての人が辿れる道でない事は明らかであった。人間は我執にとらわれ、狭い自意識の殻の中で身構えている限り、本当の安心を手に入れる事は出来ないのである。

それに対して実篤は、個人の狭い自意識の殻を打ち破り、個人を人類(更には自然・宇宙)という不滅のものと結びつける事によつて、死を乗り越えようと企てる。個人的な命がついてもそれは個々の意識が減じたに過ぎず、より大きな存在と一体化する事によつて半永久的に生き続ける事が出来るからである。

こうした、個々の人間と、それを越える人類等との関係を、実篤は、しばしば、木の枝葉と木の幹との関係にたとえて説明している。《切りとられた葉》にとつては、《葉の枯れることは全然滅亡を意味》するが、幹につながっている葉は、《自身が枯れてもその木が枯れない間は真の滅亡では》(『人生に就て』(五)「荒野」)ない。現代人は、《幹をはなれた枝葉のやうな》(『六号雑誌』(6)「明44・7「白樺」)状態にあるが、実篤は《枝と葉を幹につけること》が自分の仕事である(『会話』「君の仕事」明44・7「白樺」)と考えていたのである。

実篤が自分を越える大きなものと一体化する事で死を乗り越えようとした早い例としては、『日はのぼれり』（明41・11・26執筆）という初期作品がある。そこでは、孤独な時には強く感じていた死の恐怖が、すべての人と一体化する事で乗り越えられている。

また、例えば『幸福者』（大8・1・4、6「白樺」）の主人公・師も、神とつながることが出来れば、我々は不滅なものの一部となる、大きな真心に自分の真心がふれる時、死の恐怖はなくなる、と説くし、『耶蘇』（大8・8・10、9・1・6「新しき村」）にも「大生命、神、宇宙、涅槃と調和した生命を送るものは、死んでも大生命にもどるものより他、何もまたないことになる。かゝる人には死は恐ろしくはない。」（二十九）と述べられているのである。

恐らく、『新しき村』で目指されていたのは、抑圧され「鎧を着てゐる」（世間知らず）心身を、無心でする労働やおどりを中心とする共同生活の中で実行的に解き放ち、大自然の中で農業によって個人の意識を超えた奥深い無意識を体得する事によって、他者・人類・自然・宇宙と一体化し、死の恐怖から癒される事だったと考えられるのである。

五

大正十四年末、実篤は、『新しき村』を出て、村外会員となる。他人の経済的な犠牲の上に成り立つ資本主義が悪いものであり、もし村こそがそうした意味での唯一の正しい場所であるのなら、村から出る事は、当然、挫折感や罪悪感を感じさせる筈である。

しかしながら、実篤は平然と村を出、出た後も平然と村と関わって村を支援し続ける。これは、村が、身体性回復の為の一種の病院であり、実篤はそこに入院して治療した結果、自らの病を克服して身体性が回復できたから、村を出たのだ、村外会員となる事は、いわば癒されての退院なのだと考えて初めて納得出来る事だろう。

『二人の男』によれば、『新しき村』の生活を始めて益々人間の出来を信用するようになり、人々と一緒に生活し、お互いに愛し愛され協力することで、『（俯仰天地に恥じるような気持からいつのまにかぬけ出ることが出来た。）』（五七）とあるし、詩『平気で生きている』（昭45・1「心」）にも『新しき村の仕事始めてから／自分は自分に生きるだけの資格がある／自覚を得た』（自分は自分の力の足りない事を／平気で認めるようになった／そして自分に出来ない事は／他人がしてくれる事を知った。）』（この世に自分にまさった処のない人は／一人もない事を本当に知った／同

時に自分の使命も知った／恥じる事なく生きる事を知った／皆を尊敬し、皆に尊敬されて。』とある。他人に勝つ天才・強者でなければ生きる資格はないとする焦りは消え、弱者である自分を受け入れられるようになり、他人をも認められるようになっているのである。

『夢』（昭13・3「日本評論」）によれば、『死の恐怖を一番強くうけたのは二十歳前』で『四十から死にたいという感じが変つたやうに自分では思つてゐる。』とある。実篤が数え四十歳になったのは、大正十三年であるから、ちょうど死の恐怖が弱まった頃に離村を決意したのだと考えてよいだろう。

彼の心は次第に落ち着いていき、書く事に対する欲望が衰える代わりに、彼の情熱は絵を描く事へと傾斜していき、南画への関心が強まっていく。こうした傾向は、大正十四年には顕著になり、昭和九年には、『僕はやつと自分が画家になりつゝ、あることを感じる。（中略）僕は文学の仕事をやめて、画許りかいて後半生を終りたくなつてゐる。』（『面白半分面白半分』昭9・2「重光」）と述べるに至るのである。実篤が、ついに手に入れた『落ちついた気持、ゆつたりした気持、無心の境、言葉が生れる必要のない生命の世界。』（『画と文学』）は、『文学、殊に小説や脚本ではあらはし憎い。（中略）意識も働かず、言葉にもならない世界、その無心な気持が画ならあらはせると思ふ』（『自分の画集に就て』昭17・3「武者小路実篤画集と画論」）からだった。

そして実篤は、赤子の境地をしばしば口にするようになり、生命の躍動のままに歌つたりおどつたりする言葉以前の赤ん坊の歓喜を賛美するようになるのである。また、梁楷の『踊布袋』に、『外界を忘れて天地間我一人といふ境地に立』（『牧谿と梁楷』（二三）昭21・10）ち、『生命の命ずるままに／歓喜雀躍してゐる』（詩『梁楷の『踊布袋』を見て』（二）昭20・10『詩と劇』（赤子の喜び、それ以上大人物のこの世と調和し切った喜び。』（『梁楷について』（五）昭42・7「うえの」を見て、『踊布袋』図を繰り返し賛美するようになる。ここでは、もはや群衆的な興奮の力を借りなくとも、生命の躍動のままに、愉快におどる事が可能となつてゐるのである。

実篤は、抽象的で間接的なイメージの世界より、具体的に直接的な現実の世界を志向する人間だった。恐らく、実篤にとって、言葉とはうまく使いこなせない不自由な道具だったのであり、文学とは、隔靴搔痒のまだるっこしい仕事だったに違いない。^(注15)

だから、絵画という具体性を持った表現の道が開けた事は、実篤にとって、想像以上に喜ばしい事だったと思われる。『元来僕は手のない画家に生れてゐたのだが、いつのまにか手が出来て来たから、画をかくことになつたにすぎない。文学の方に

は画がかけないと迷信してゐたから入つたので、いつも不安がぬけなかつた。画の世界に帰つて来て、僕はわが家に帰つて来たやうな喜びを感じてゐる。』(『個展』昭14・4「日本評論」という発言は、こうした心境をよく表わすものである。実篤が、盲目になった画家が文学に志すという設定の『その妹』(大4・3「白樺」)を早くから書いてゐる事も、彼にとって文学よりも絵画の方が本来的なものであつた事を想像させる。

道ばたの石や雑草に神が作つた美を見出し、それらを尊敬して自然の傑作をなんとかさながらに全生命的に描こうと真剣に取り組み、進歩を目指して勉強し続ける手下だが誠実無比な画家・「馬鹿」は、晩年の実篤の自画像であらう。写生は無心になつて対象と一体化しようとする一種の求道の試みなのだが、求道に伴いがちな禁欲や抑圧とは無縁で、そこには美に対する讃嘆・謙虚な喜びが満ちあふれているのである。

『老いたる画家は散歩し／見るものが皆美しい／美しいものばかり／老人は段々嬉しくなる／夢中になる／興奮してくる／宇宙と自分が一つになる／皆が兄弟姉妹になる／皆が画をかくてはしがるやうに思はれる／生命の泉があふれ出る／私は彼等を讃嘆し／彼等は私を讃嘆する』(『老画家の詩』昭22・1・26「夕刊信州」とは、晩年の実篤の心境であらう。彼が五十年の後半生をかけて、およそ五万五千点もの絵画を描き続けて倦む事がなかつたのは、それが彼の本質に深く根ざしていたからに他ならないのである。

【注】

(1) 『人生に就て』(『荒野』)には、(メテリリンクも云つてゐるやうに人が人を知るのは言葉や表情を通して間接に知るよりも、もつと直接に知ることが出来ると思へる。目と目と会話するに止まらずして、心と心と人間の知り能はざる言葉を以て語つてゐるかも知れない。)(七)とある。『お目出たき人』にも、『自分は鶴と話したことはないのだ。自分はたゞ鶴の心と自分の心とはもう三四年前から他人ではないと云ふことを信じてゐる。(中略)二三年前からマーテルリンクを愛読するやうになつてからなほさう云ふやうに思へるやうになつた。口ではうそがつける。耳にはうそがつける。しかし真心はうそをつかない。真心にはうそはつけない。』(四)とある。

(2) ただし、『お目出たき人』の中では、例えば『鶴の個性はたゞ自分の個性とのみ夫婦になり得るやうに自分は五年前からどうしてか迷信してゐるのだ。』

(四) というやうに、『迷信』という言葉も多用され、主人公の鶴への思いを

妄想として客観的に見る視点も確保されている。

(3) 『世間知らず』ではC子と主人公が淋しい者同士である事が強調されると共に、C子は『世間を恐れない人』(二十)とあり、『或る男』にも房子は『他の人にどう思はれると云ふことには一向平気で』『自分の好きなことをしてよるこんであれば皆もよるこぶもの、やうに心得てゐる。』(百五十八)と描かれ、主人公はそこに『自分の内に』『悪として』『殺されてゐる』『本能』を見ている。

詩『お母ちゃん』(昭44・3「心」)からも分かるやうに、恐らく実篤にとつて安子が『第二の母』『第四の母』の系統に属する母代わりの恋人だつたのに対し、房子には、世間を恐れ抑圧された実篤を裏返した、いわばフリー・チャイルドとしての側面と、実篤と共通する世間・大人の常識からはみ出した『淋しい』『小供』(『世間知らず』)としての側面とがあり、一種の分身だと感じていたからこそ、離婚後も親しく面倒を見続けたのだらう。『或る男の話』(大13・3「改造」)には『自分が房子を愛してゐる愛は親の愛に似てゐるやうに思ふ。』(六)とあるし、『気まぐれ日記』の大正十二年九月二十四日の所にも『安子には恋してゐる。』のに対して『房子には親しさを感じるのぞ恋とはちがう。妹か子供を感じた。』とある。

(4) 例えば、『旧稿の内より(潔の日記)』『なまぬるい室』に取り上げられた『男女交際論について』(明42・3・3執筆)にも『自分の胸にある華やかな歓楽の調べを出す糸は三年の間いたづらにならず人のくるのを待つて居る。』とあつたし、『第三の隠者の運命』にも『私の華やかな喜びを調べる絃は鳴らされることなしに、心の奥に用心深くしまわれてゐた。処があなたはその絃を声高に鳴してくれる。』(四十九)とあつた。『人間について』(大11・3・5、7、9「婦人公論」)にも『我等に与へられたいろ／＼の心の絃は、ヴィオリンよりもつと／＼の音を出すことが出来』(二)とある。

(5) 『お目出たき人』においては、高下駄をかけて来る鶴の姿が主人公の心に残る。『愛と死』(昭14・7「日本評論」)においても、夏子の『逆立ち』や『宙がへり』が村岡の心を惹きつける。『友情』においても、杉子の歌声が大宮の心に響くし、大宮が杉子を好きになつたのは縄跳びしている姿を見た時だった。

(6) 『歌くらべ』は、早くは、『光の子と闇の子』(『荒野』)の『穢れし心』の歌う『暗の歌』と『清き心』の歌う『光の歌』との対決に見る事が出来る。『第三の隠者の運命』でも、ユダを思わせるXたちが心をそそるおどりで主人公

を誘惑しようとするのに対抗して、新しい世界の中心メンバーたちはお祭りをし、おどったり芝居をしたり詩を朗読したりするという「おどくらべ」で戦っている。

(7) 『幸福者』には「もし日常生活に真心を機会が与へられる度に生かすことが出来るものには言葉は不必要であらう。しかし多くの人はまだ言葉の御厄介になることで、自覚を得、信仰を得るのだ。言葉なくしては折角真心が動いても意識にのぼらずに消えてゆくのだ。心の底を動かすのは真心だ。だがその真心のありがた味を意識するのは今の人はまだ言葉の助けをからなければならぬのだ。聖人同志には黙つてても話が出来る。だが普通の人には道をとくのに言葉が必要だ。説明が必要だ。面白味の説明を聞いて始めて半ば合点がゆくのだ。」(六)とある。

(8) 明治四十一年三月七日の日記(『旧稿の内より(潔の日記)』)には、自分の書いた小説は小説ではない、新体詩は詩ではない、そこに特色と価値があるような気がする、とある。

(9) 実篤が繰り返し情熱を表明している「劇詩」・「詩劇」というのも、一般的な意味のドラマではない。『日常の会話』ではなく、『噴火山的の言葉を噴出』する『心の会話』即ち『本来の意味で詩』によって、『見物人の心にある律音にのせて、それを純な気持で、最後迄導くこと』(『劇の会話』昭19・5『野菜讃』)を目標とするものだったのである。

(10) 例えば、『空想』(『お目出たき人』)に描かれた妹などは、そうした仮構の他者である。

(11) 結婚後の自分の生活がふやけたものになったという実感、また『六号雑記』(大7・9『白樺』)に「砂上に住んでゐるのではいくら創作しても不安心だ。」(柱がくされかけたり、家根がこわれたりしてゐる家で、安心して生きてゆくわけにはゆかなくなつたのだ。)とあるように、我孫子に豪邸を建てた事が実篤の負い目を刺激し、『新しき村』へと駆り立てたという事もある。

(12) 『新しき村に就ての雑感』(大7・7『新しき村』)でも、第二種会員は「新しき村に喜捨する」(『信者』(二種の会員)、第一種会員は『僧侶』(自分達は)と書かれている。

(13) 群衆的な歓喜のおどりで大団円を迎える戯曲には、『一日の素盞鳴尊』(大10・1『改造』)、『楽園の一隅』(大13・11『不二』)、『詩人の夢想』(昭2・12・3・2『大調和』)、『新しき村の満十五年を祝して』(昭8・11『新しき村』)、『ある詩人の夢』(昭13・11『愛情の書』)など多数の例がある。この他

にも、実篤の戯曲には、他の作家には例を見ないほど、おどりの場面が頻出するが、この事は、実篤が身体性をいかに重視していたかを窺わせる。

(14) 実篤が、自分の娘を育ててみて、赤子の無邪気さを改めて知り、暗かった自分の幼児期に対する代償的満足を得た事とも関連しよう。

(15) 梁楷の「踊布袋」を賛美したものには、他に、『梁楷の人物画』(昭16・9『婦人公論』)、『詩「梁楷の「踊布袋」を見て」』(昭16・10『馬鈴薯』)、『詩「牧谿と梁楷を讃美す」』(『牧谿と梁楷』)、『或る男の気焔』(昭38・9『文芸』)などがある。

(16) 実篤が言葉をまだるっこしいものと感じていた事は、『人生に就て』の「言葉と云ふ不完全なる音」(『文字と云ふ可笑な特徴』(六)という言い方や『六号感想』(3)『自分の言葉』(大2・3『白樺』)の自分の言葉は「自分の言ひたいことをどうかかかか暗示することが出来る。」という表現から窺える。

(17) 馬鹿一が世間から馬鹿にされても「万事善意にとつて、いつも嬉しそうにしてゐる」(『馬鹿一』(二)昭23・11『心』)人物と造型されたのは、他人の評価を気にする嘗ての実篤の対人恐怖症・被害妄想的な身構えがゆるんだ事を示している。ただし、世間は馬鹿一を馬鹿にするが、真理先生・白雲・泰山は彼を高く評価し、やがて世間も彼を認める事になる。

【付記】

本稿は、有島武郎研究会第三十五回大会(平成十六年六月五日)の口頭発表に加筆したものである。